

死後のケアに対する看護師の基本的技術・儀礼的行為・思いに関する実態調査

—— 経験年数・ケア件数別に比較して ——

副看護師長研修4グループ ○田中千秋 大西雅子 中村一美

岡本政枝 下田松子 横山康子

key word: 死後のケア(処置)、儀礼的行為、基本的技術

I. はじめに

当院における死後のケアは、従来の我が国古来の慣習を取り入れた内容をマニュアル化し、看護技術として指導を行なっている。私たち医療者は、日常的に人間の死を体験し、専門的な関わりから援助を積み重ねている。しかし、遺体を整える方法や知識には幅があり、マニュアルの捉え方も様々である。これまで死後のケアについて、看護師の思いや死生観などの実態調査はされているが、死後のケアの技術検討についての報告は少ない。また近年、死後の処置に対しての諸料金規定が認められるようになったことから、更なる質の向上が必要と考えられる。

II. 目的

死後のケア時における基本的技術の習得状況、儀礼的行為、思い等の実態を明らかにし、死後の処置の質、向上と看護師の指導に役立てる。

III. 研究方法

1. 期間:平成17年6月～9月
2. 対象:当院看護師440名
3. データ収集:死後のケアについては、選択的的回答形式と自由記述式用紙を作成し、看護師の思いについては半構成質問用紙を用い調査した。
4. データ分析:基本的技術6項目(義歯の入れる時期・綿の詰め方・綿の詰める順番・綿を詰める体位・口の閉じ方・眼の閉じ方)と儀礼的行為5項目(着付け・紐の結び方・手の組み方・死化粧の理由・白い布の意味)を得点化して、1年毎の経験年数別と院内の研修対象年数別、死後の処置の件数別に集計し、得点の平均値の差を一元配置分散分析法で行い、有意差があった場合多重比較をExcelで統計処理をおこなった。 $p < 0.05$ を有意差ありとした。看護師の思いについては内容の910を3つにカテゴリー化した。
5. 倫理的配慮:研究の主旨と方法、得られた情報の守秘、研究途中でも中止は可能なこと、研究に同意なくとも本人の不利益にならないことなどの書かれた研究同意書にて同意を得た。個人が特定されないよう

に配慮した。

IV. 結果

1. アンケートの回収は397名(回収率90.2%)で、性別では、男性9名、女性388名であった。平均経験年数は、 10.12 ± 6.00 年(1から29)であった。診療科別では、外科148名、内科102名、中央診療部58名、その他89名であった。
2. 基本的技術と儀礼的行為について
①1年毎の経験年数別にみた基本的技術と儀礼的行為の平均得点をみると、基本的技術においては6点満点中8～9年目に1～1.4点と低く、22年目以降は1.3～5点と得点の差がみられた。全体の平均点は2.3(± 0.8)点であった。(図1) 儀礼的行為においては、5点満点中全体の平均点は2.4(± 0.58)点で、28年目以降は1～2.4点と低い得点であった。(図2) 経験年数と基本的技術・儀礼的行為については、全ての項目で有意差はみられなかった。
②院内の研修対象年数別にみた基本的技術と儀礼的行為の平均点をみると、基本的技術において一番高いのは21年目以上で2.2点、一番低いのは1年目で1.3点であった。(図3) 儀礼的行為において一番高いのは11～20年目で2.8点、一番低いのは4～10年目で1.9点であった。(図4)
③死後のケア件数別の人数では、10回未満170名、10～19回106名、20～29回68名、30回以上70名であった。基本的技術のケア件数別平均点は、10回未満1.5点、10～19回2.5点、20～29回2.0点、30回以上2.5点であり(図5)、ケア件数10回未満と10回以上、30回以上に有意差がみられた。
④儀礼的行為のケア件数別平均点は、10回未満2.5点、10～19回1.8点、20～29回2.8点、30回以上2.9点であり(図6)、ケア件数10回未満と10回以上、30回以上に有意差がみられ、10回未満と20回以上では有意な傾向がみられた。
⑤死後のケアの平均経験回数は1年目3.4回、2年目4.7回、3年目6.5回、4～10年目12.9回、11～20年目17.3回、21年目以上20.6回であった。
⑥死後のケアの指導については、職場の先輩が339名、

学校教育 31 名、院内マニュアル 2 名、書籍 4 名であった。

3. 看護師の思いについて

「死後の処置についてどのように考えるか」では、患者への最後の看護処置 183 名、儀礼的行為 68 名。医学的・看護的目的 19 名であった。(表 1)「初めて死後の処置をした時の気持」では、死者に対して漠然とした怖さを感じた 80 名、死者に対して敬虔な気持ち 77 名、生と死のあまりの違いに不安になった 38 名、最後のケアができたという満足感 1 名であった。(表 2)「死後のケアに対してどのような気持ちで接するか」では、常に敬虔な気持ちになる 176 名、最後のケアができ満足 44 名、死者に対して漠然とした恐さを感じた 4 名であった。「現在のケア以外にしてあげたいこと」では、家族の希望に添ったケア 18 名、洗髪 16 名、入浴 10 名であった。「現在のエンゼルセットについての意見」では、化粧セットがほしい 41 名、綿が多い 39 名、顔のガーゼが貧弱 13 名、紙おむつのサイズが選べると良い 11 名であった。「処置料に見合ったケアを行なっているか」では、見合っている 69 名、処置料がいくらか知らない 64 名、見合っているとは思わない 20 名、分からない 51 名であった。

V. 考察

死後のケアは、経験年数の多いほど基本的技術や儀礼的行為がおこなえていると予想していたが、結果は経験年数と基本的技術や儀礼的行為には有意差はなく、経験年数に関係ないことが分かった。そして得点も低く知識や技術不足であることが分かった。このことは、死後のケアは患者にとって一度きりのことで、振り返ることの少ない処置であり、技術検討が十分行われず、向上の機会が少ないためだと考えられる。また、新人教育においても死後のケアに関し、事務的手続きについては評価されるが、具体的な処置については評価がされていないことが原因ではないかと考える。儀礼的行為に関しては、その意味も理解しないで、ただ先輩から指導を受け、「昔からこうしているから」というように捉えていることが多いと思われる。小林は「儀礼的行為は、亡くなった人の安らかな旅路を願う意味でも古来より伝わる作法を継承していくことは重要である」³⁾とされており、今後継続教育や研修の機会を持つことが必要と思われる。しかしケア件数が多いほど基本的技術も儀礼的行為も得点が高いことから、経験を重ねることで看護師の知識・技術の向上がみられていることが分かった。死後のケアの指

導は、マニュアルよりその場で先輩から指導を受けることが大半である為先輩の役割は重大であり、その場での死後の処置を振り返ることが重要と考えられる。

死後のケアに対する看護師の思いに関して、藤腹は「死後の処置は死の転帰をとった患者に行う看護者の最後の看護行為である」²⁾と述べているように、今回の調査でも「患者への最後の看護処置」と答えている人が 183 名おり、死後の処置を看護行為と捉えている人が多いことは、看護専門職としての意識の現われと考える。

初めて死後の処置をした時、「死者に対して漠然とした怖さを感じている」と 80 名が答えているが、経験を重ねていくことで、「最後のケアができて満足」と変化がみられている。これは、生前からの患者様との良い関わりにより思いを込めた処置ができるようになることでの気持の変化と考える。

「人の命を看取することは、観念的な知識と技術だけでなく、人間的な成熟がなければ難しい」³⁾といわれているが、死後のケアを通して単に身体の整容だけでなく、家族への悲嘆援助、死生観を育む看護師の成長の場であり、新人教育においても重要なこととして捉えていくことが大切であると考えられる。

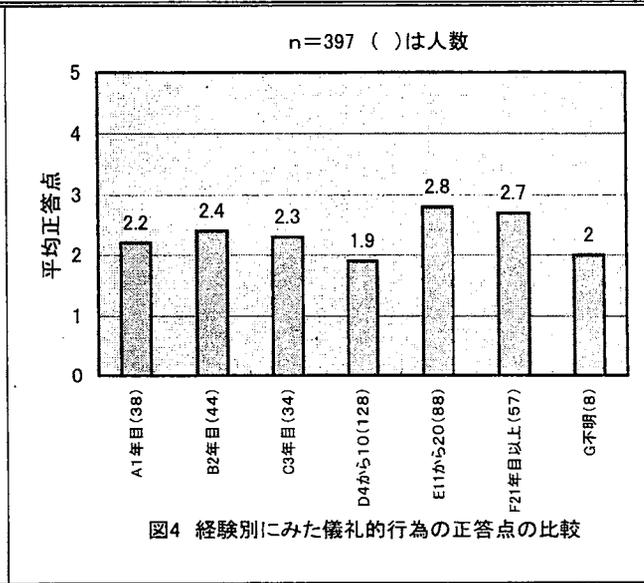
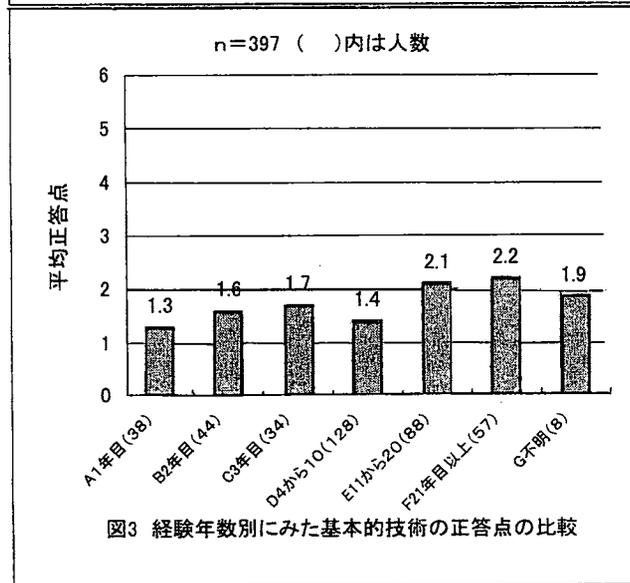
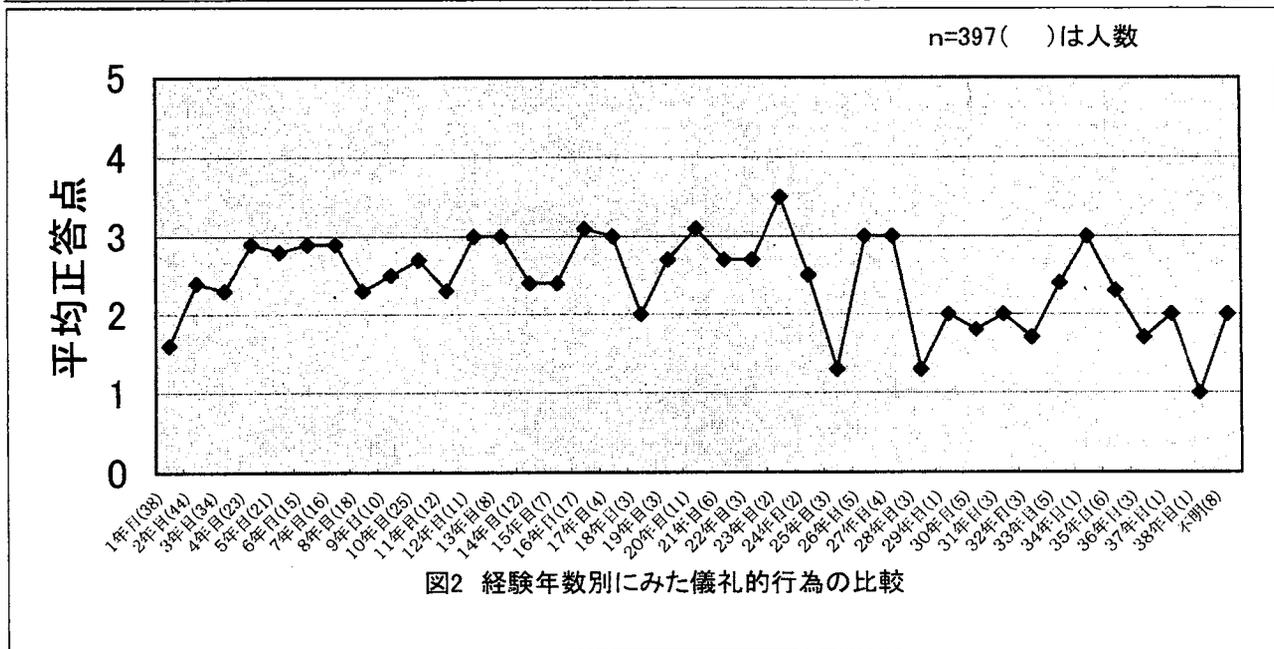
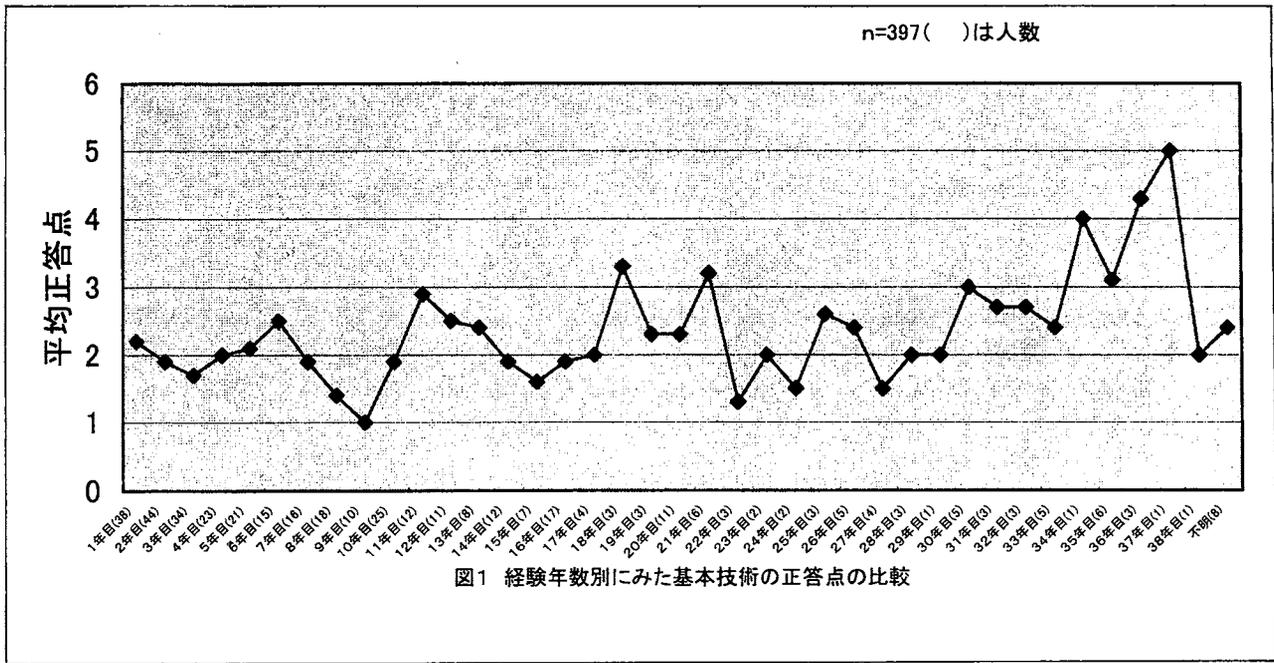
院内のエンゼルセットに対する意見に、「化粧セットの充実」を 41 名が掲げており、死化粧への関心の高さが伺える。メイク用品の充実と死化粧の技術の向上が必要と思われる。

VI. 結論

死後のケアにおける基本的技術と儀礼的行為については、経験年数には関係なかったが、ケア件数が多いほど正しく行なえていることが分かった。しかし、基本的技術と儀礼的行為の修得は十分でないため、新人からの教育が必要と考える。

引用・参考文献

- 1) 片野裕美：「死後の処置はどう行われているか、そして看護婦は何をなすべきか」エキスパートナース、Vol11、No. 9 p26～29 1995
- 2) 藤腹明子：「死後の処置に関するナース意識の移り変わり」エキスパートナース、Vol11 No. 9 p30～33 1995
- 3) 小林裕子：「死後のケアの再考」新潟星陵大学紀要第 5 号 3 月 2005/09/29
- 4) 小林光恵：「ケアとしての死化粧」日本看護協会出版会 2004



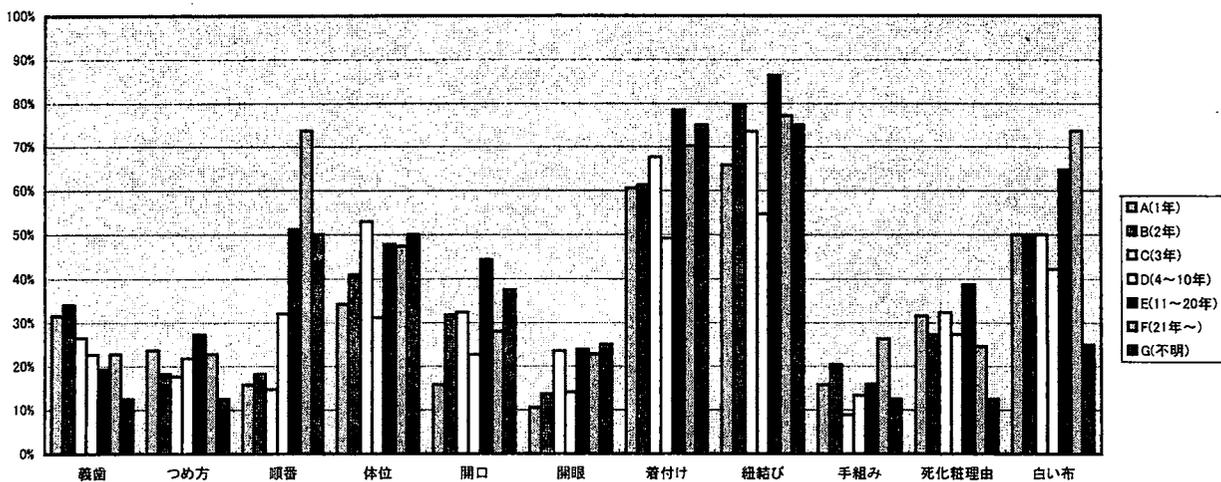
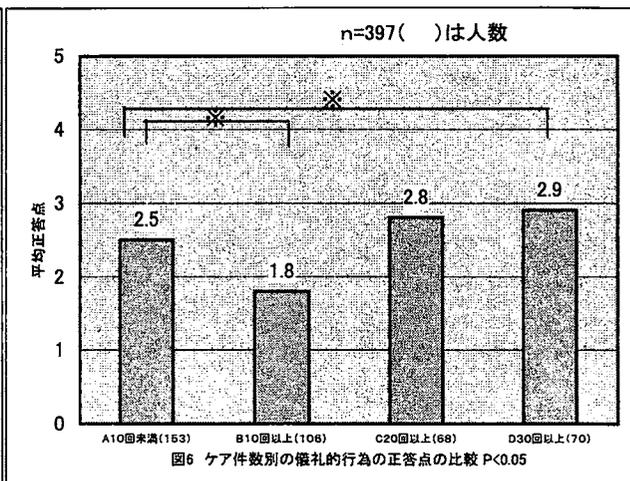
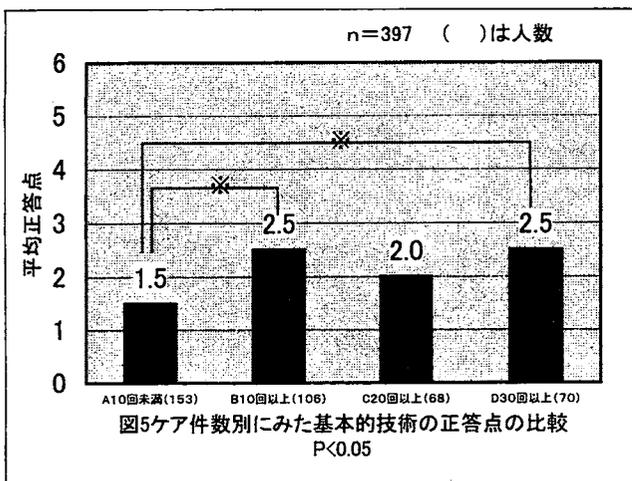


表1 あなたは死後の処置についてどのように考えていますか

	人数
1 患者への最後の看護処置	183
2 儀礼的行為	68
3 医学的・看護的目的	14
4 慣習的行為	7
5 医学的に必要な処置	5
6 その他	31
合計	308

表2 死後の処置をした時の気持ちの変化

	初めての気持ち(人数)	その後の気持ち(人数)
1 死者に対して漠然とした怖さを感じた	80	4
2 死者に対して敬虔な気持ちになる	77	176
3 生と死のあまりの違いに不安になった	38	
4 いやなことだが仕事だからしかたがない	4	
5 死後の処置は避けたい	2	4
6 最後のケアができたという満足感	1	44
7 自分の死について考える		3
8 特別何も感じない		3
9 その他	110	56
合計	312	290